

衛星・宇宙業界の最近の動向

「第12回衛星放送協会オリジナル番組アワード」グランプリ 「4K8K 衛星放送視聴可能機器台数」

神谷 直亮

7月から8月にかけて民間衛星通信業界に地殻変動とも言える大きな動きが見られた。

まず、7月25日に Eutelsat と OneWeb の両社が合併に向けた覚書に調印した。Eutelsat 社の静止軌道 (GEO) 衛星と OneWeb 社が推進している低軌道周回 (LEO) 衛星によるハイブリッド・オペレーションで、世界の衛星通信のリーダーになれると確信したものと思われる。報道発表によれば、英国政府の特別所有分 (5億ドル) を除く OneWeb 社のすべての所有権を Eutelsat 社が獲得することになる。関係先との調整を経て合併が成立するのは、2023 年中ごろになる見込みである。なお、本件については、8月になって EU がイギリス政府の影響力が強くなりすぎるのを理由に、合併に対する反対表明を発し混んとしてきた。

一方、規模は小さいがタイの Thaicom 社とアメリカで LEO を運用する Globalstar 社が業務協定を結んでアジアを中心に GEO と LEO のハイブリッド・オペレーションを行うことが決まった。次いで、衛星通信業界の巨頭と目される SES 社と Intelsat 社の合併説が浮上し、昨年の ViaSat 社と Inmarsat 社の大型合併に輪をかけるような事態となっている。

8月4日付けのファイナンシャルタイムズが報じたので、かなり真剣に話し合われているようだが、今のところ両社は沈黙を保っている。

さらに、日本では NTT とスカパー JSAT が、7月20日に Space Compass 社を設立して世界の注目的になっている。グローバルなコンピューティングネットワーク技術を有する NTT と静止衛星を中心とした衛星通信分野で豊富な実績を積み上げてきたスカパー JSAT が提携して、宇宙統合コンピューティングネットワークによる新たな宇宙インフラビジネスを展開する使命を負うのがこの Space Compass 社である。社名の通りデータ中継衛星、静止衛星、低軌道周回衛星などを包含する「宇宙の羅針盤」としての地位を確立して欲しいものである。両社の実力が試される絶好の機会が到来したと言える。

一方、軍事衛星業界では、極超音速ミサイルや高速滑空弾が出現したことでこれらに対応するための新しい探知・追尾システムを構築する必要性に迫られている。このために米国のみならず世界の主要国にとって、高性能超低軌道周回衛星 (VLEO) と極超音速・弾道追跡宇宙センサー (Hypersonic and Ballistic Tracking Space Sensor) の開発・運用が急務と

なってきた。つまり、静止軌道で弾道ミサイルの発射を探知する従来の早期警戒衛星「SBIRS (Space-Based Infrared System)」に加えて、低軌道を周回する小型赤外線観測衛星コンステレーションを活用するデュアルシステムの完成を目指すことになった。

具体的な動きとしては、Space Development Agency (米宇宙開発庁) が SpaceX 社と L3Harris 社と契約を結び「Tracking Layer Satellites」の開発を進めており、実証試験用の衛星が間もなく打ち上げられる予定である。

その後、米宇宙開発庁は、第2世代の Tracking Layer Satellites を L3Harris と Northrop Grumman に発注している。軍事業界の情報によれば、赤外線探知機能を有する合計 14 機の衛星で、各社半数ずつ製作するという。打ち上げは、2024 年 4 月から開始の予定である。

日本政府も 1 月に北朝鮮が極超音速ミサイルの発射実験を実施した確証を得たことで、防衛省が来年度予算案に「赤外線観測衛星コンステレーション」に関する研究費を約 3 億円計上したとの報道がなされている。

去る 7 月 22 日には、Thales Alenia Space 社と QinetiQ 社が、高度 300km 以下を周回する VLEO 衛星の開発を行うと発表した。「Skimsat」と名付けたこの衛

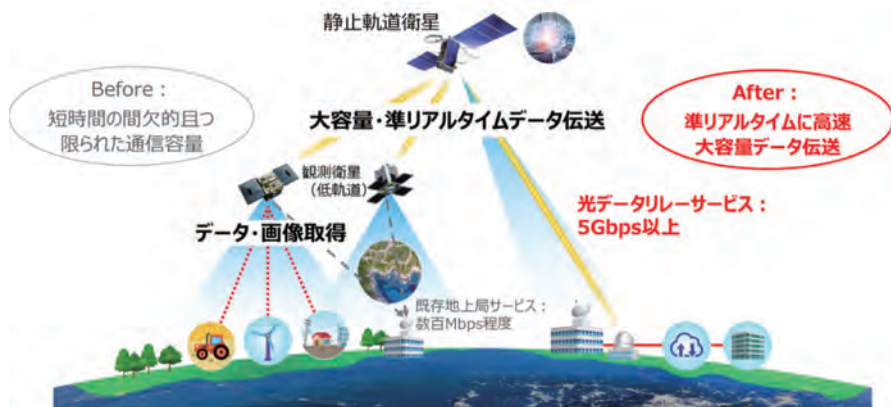


写真1 NTT とスカパー JSAT は、図のような宇宙統合コンピューティングネットワークによる新たな宇宙インフラビジネスを推進する Space Compass 社を設立した。(出典: skypeperfectjsat.space)



写真2 「第12回衛星放送協会オリジナル番組アワード」の「グランプリ」には、「24時間まるごと坂本浩一の特撮アクション 特別編 (制作: 日本映画専門チャンネル)」が選ばれた。(出典: eiseihoso.org)

星には、全電気推進システムが搭載されかなり軽量化が図られると思われる。しかし、VLEOでの観測衛星は、精度が向上し軽量化による打ち上げコストが削減できるとしても、大気による抵抗をまともに受けるので運用寿命が6～12か月になると推定される。

振り返ってみるとVLEO衛星については、宇宙航空研究開発機構（JAXA）が2017年末から2019末にかけてすでに超低高度衛星技術試験機「つばめ（SLATS）」の運用を成功裏に終えている。しかし、高度180kmから300kmを飛行し、ギネス世界記録に認定されたこの技術試験機を軍用に使用できるかはこれからの検討課題である。その後JAXAは、今年7月24日に観測ロケット「520-RD1」を打ち上げた。音速の5～6倍の極超音速で飛行しながら燃焼試験を実施して、燃焼データの収集と要素技術の習得を行うのが目的という。得られたデータは、極超音速誘導弾の開発に活用できると思われる。

さらに宇宙業界では、宇宙強国を目指す中国による独自の宇宙ステーションの建設が進められている。新しい動きとしては、7月24日に「問天」と名付けた宇宙実験施設を長征5号ロケットで打ち上げ、宇宙ステーションとのドッキングに成功した。すでに宇宙ステーションに滞在している宇宙飛行士が、間もなく「問天」に移って実験を行うものと思われる。

「第12回衛星放送協会オリジナル番組アワード」のグランプリが決定

衛星放送協会が6月13日に発表した「第12回衛星放送協会オリジナル番組アワード」の最優秀賞については、本誌7月号を参照願いたい。同協会は、7月21日に、よみうり大手町ホールで授賞式を開催し、番組部門6ジャンルの最優秀賞の中から待望の「グランプリ」作品を選出した。栄えあるグランプリに輝いたのは、「24時間まるごと 坂本浩一の特撮アクション 特別編（制作：日本映画専門チャンネル）」であった。

この作品は、「ウルトラマン」「仮面ライダー」「スーパー戦隊」という特撮3大ヒーローを生み出した坂本浩一監督の代表作からアメリカ時代に手掛けた作品まで24時間にわたりノンストップで放送されたものである。また、これに合わせフリーアナウ

ンサーの笠井信輔とのインタビュー番組も制作し、監督自身が実演を交えながら特撮アクションを徹底解説した点が評価された。吉岡忍審査委員長は、「日本の特撮映画の演出家、監督、プロデューサーとして活躍してきた坂本監督の30年間を振り返るとともに、特撮映画にとどまらない身体表現の本質まで明らかにしていく巧みな編集がすばらしかった」とコメントしている。

「4K8K衛星放送視聴可能機器台数」

7月21日に放送サービス高度化推進協会（A-PAB）が、6月末現在の新4K8K衛星放送視聴可能機器台数を発表した。これによれば、2022年6月の出荷台数と6月末現在の累計台数は、次のようになっている。

	6月分	6月末累計
新チューナー内蔵テレビ：	231,000	9,382,000
外付け新チューナー：	0	259,000
新チューナー内蔵録画機：	27,000	1,461,000
新チューナー内蔵STB：	41,000	2,101,000
合計	299,000	13,203,000

6月の出荷台数は約30万台で、前年同期比65.1%に減少した。A-PABは、これを「東京オリンピック・パラリンピックの駆け込み需要の反動減と見なされる」とコメントしている。一方で、2011年7月にアナログ放送が終了して以来10年以上経過しているので、業界では年末に向けて買い替え需要が出てくるのではないかと期待が高まっている。さらに、A-PABが掲げる大目標は「2024パリオリンピックまでに2,500万台」という大台を達成することである。このためには、若い世代による視聴を促進する必要があると判断し、女子高生3人によるショートムービー「青春は、いつだって、高画質衛星放送」を制作して魅力を訴求し



写真3 石原慎太郎さんが、回想録「私という男の生涯」の執筆に使用したと思われる机とワープロが、「お別れの会」で披露された。

ていくという。

石原慎太郎さんのこと（3）

すでに2回にわたって本コラムで述べてきたが、最後に彼が残した回想録「私という男の生涯」に触れたいと思う。この自伝は、彼の死後に発売する約束で、2022年6月に幻冬舎から出版された。日本の初島、北マリアナ、チリなどで命拾いをした体験談や愛せし女たちとの「男」としての懐旧談など、政治家としての幅の広い経験談も含めて多角的に回想しており、非常に印象に残る「石原慎太郎自伝」であった。衛星についての記述はさすがに見当たらなかったが、宇宙に関しては、宇宙物理学者として知られるホーキング博士の講演に触れている。講演の後の質疑応答で「この宇宙全体に地球のようにはかなり高度な文明を保有している惑星がいくつくらいあるか」という問いに「太陽系を超えたその先の先の全宇宙ということなら200万ほど」と答えたと記している。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト

HD TV, 3D TV and IP OVER SATELLITE ECO OPERATION

スマート・サテライト・ニュース・ギャザリング

<http://www.bizeat.jp>

ニッサン新エルグランド4WD
5名定員

1.2m径・自動捕捉アンテナ搭載
車高2.2m 以下（地下駐車場可）

3.6 KVA NMG アイディング運用
水圧エコ・ポール4m 搭載
強化サスペンション
国内（100V）海外（240V）対応
IPコントロール
ハイビジョン映像伝送
運転席からワンマンオペレーション

設計・製造・衛星通信のことなら
エーティコミュニケーションズ株式会社
TEL: 03-5772-9125